来住廃寺３８次調査現地説明会資料

調査主体：松山市教育委員会事務局文化財課
調査期間：平成２２年５月２０日より８月１３日（予定）

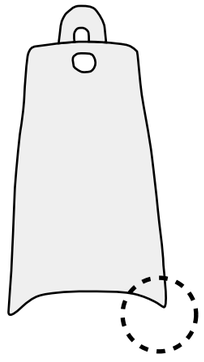
調査の目的と調査のながれ

今回の調査では、来住廃寺に伴う寺院関連遺構の広がりを確認するために、金堂基壇の西側に調査区を設定し、来住廃寺に関連する遺構の検出に努めました。また、この場所が来住廃寺建立以前の遺構である回廊状遺構の南東部分にあたることから、回廊状遺構の性格解明にもつながるのではないかと期待されました。

これまでの調査成果より、来住廃寺の金堂基壇は弥生時代～古墳時代の遺物包含層の上面に土を盛り上げて築かれていることがわかっています。今回は、この遺物包含層の上面で、多量の古代瓦が出土することを確認し、同様に遺物包含層の上面において白色粘土の分布を確認したことにより、遺物包含層の上面を遺構検出面とすることに努めました。

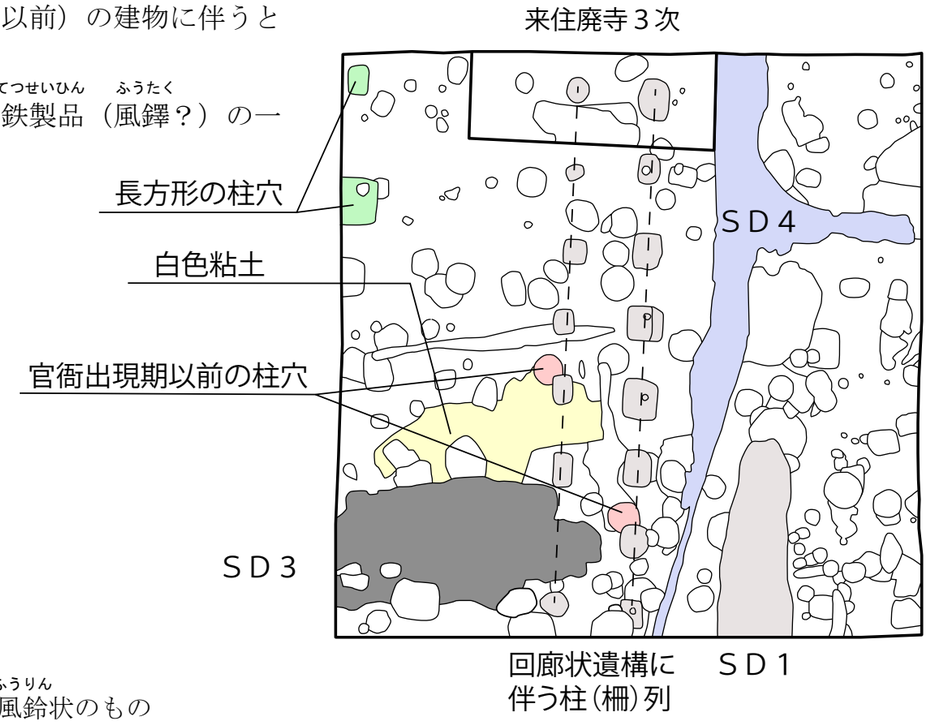
確認された遺構と遺物について

１．来住廃寺に伴うと考えられる溝（ＳＤ３）を確認しました。
２．回廊状遺構に伴う柱列（柵列）および区画溝（ＳＤ１）を確認しました。
３．官衙・来住廃寺の建物跡を構成すると考えられる長方形の柱穴を確認しました。
４．人為的に持ち込まれたと考えられる白色の粘土が分布する範囲を確認しました。
５．回廊状遺構よりも古い段階（官衙出現期以前）の建物に伴うと考えられる柱穴を確認しました。
６．ＳＤ３より来住廃寺に伴う荘厳具である鉄製品（風鐸？）の一部が出土しました。



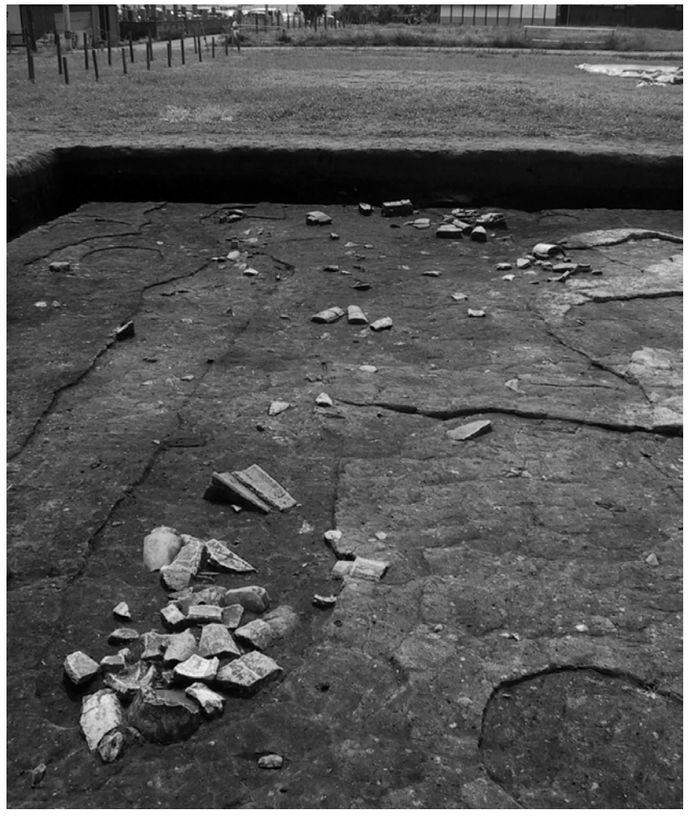
今回確認した風鐸の推定部位

※風鐸…仏堂の屋根の四隅や塔の相輪に吊るす風鈴状のもの



来住廃寺３８次調査遺構配置図（Ｓ＝１：１５０）

遺構を検出したようす



ＳＤ３遺物出土状況